

## 論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	田中 壮泰 (たなか もりやす)
○学位の種類	博士 (学術)
○授与番号	甲 第 979 号
○授与年月日	2014 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	戦間期ポーランドのユダヤ文学研究 —異文化接触と複数言語使用の観点から—
○審査委員	(主査) 渡辺 公三 (立命館大学大学院先端総合学術研究科教授) 小泉 義之 (立命館大学大学院先端総合学術研究科教授) 吉田 寛 (立命館大学大学院先端総合学術研究科准教授) 沼野 充義 (東京大学文学部言語文化学学科教授)

### <論文の内容の要旨>

本論文が対象とするのはポーランド語で書かれた文学である。ポーランドは周知のように 18 世紀後半の三度にわたる分割によって、第一次世界大戦後に独立を果たすまで国家として存在しなかった。この「三国分割」の時代にもポーランド語による文学創作は営々として続けられ、そして独立を果たした後の両大戦間期は、ポーランド語による創作が「国民文学」として開花した。このいわば僚乱期ともいえる時代を対象として、さらに母語としてのポーランド語による文学表現の表層のもとで、聴覚を研ぎ澄ませば聞こえるさまざまなマイノリティーの言語の響きを取り取る試み、それが本論文である。

章立てのみに限るが、本論文の構成は以下の通りである。

序章 先行研究／第一章 ユリアン・トゥヴィムと戦間期—ポーランド、ユダヤ、ジプシー—  
第二章 二言語詩人フォーゲル／第三章 意識の揺らぎ—アドルフ・ルドニツキ論／第四章 カフカの後継者たち／終章

序章では、両大戦間期に同時代的に刊行されたポーランド文学研究では、ユダヤ系作家が等閑視されていることを確認したうえで、1982 年に刊行されすでに古典とも目されるサンダウエル著『二十世紀におけるユダヤ系ポーランド作家の状況』の批判的検討を出発点に置く。この古典的研究がユダヤ系作家の「同化」の側面を重視するあまり、やや極端な類型化の枠で捉えていることを批判し、同化ユダヤ系作家における異文化への関心、複数

言語への感受性とその創作の源泉への転化を注視することが示される。この視点が副題に明示されている。

第一章は、童話やキャバレーで歌われる詩から第二次大戦後の亡命先のアメリカ合衆国での活動まで旺盛な創作を持続し、国民的に受け入れられた作家ユリアン・トゥヴィムを取り上げ、そのジプシーというマイノリティーへの熱烈な関心の根源を検討する。

第二章は、ポーランド語を母語としながら、習得言語としてのイディッシュ語での創作に傾注した女性詩人デボラ・フォーゲルをとりあげ、イディッシュ語による創作によってポーランドに居つつ、ニューヨークのイディッシュ語作家サークルにつながっていた、その創作活動の広がりを確認している。

第三章では、戦間期に20代で活躍し始めたいわゆる「1910年世代」の代表格であるアドルフ・ルドニツキの、いわばひきこもり青年を主人公とした『ねずみ』の意識の描写が映画の技法と対比され、ポーランド語に写し取られたイディッシュ語の響きが検出される。

第四章では、戦間期に訳されすでにユダヤ系ポーランド語作家たちにある影響力を発揮し始めていたカフカの受容を検討し、その『変身』を「介護文学」として読むという視点から

『ねずみ』の再読と、もうひとりの作家ブルーノ・シュルツの『鳥』の読解を提示する。二作ともに、定職のない青年が介護にあたる（前者ではほぼ寝たきりの女性を、後者では父を）経験が重要なプロットをなしているのである。以上の論述をふまえ、終章では、ユダヤ系作家の「同化」の視点からは見えない、同時代世界への広がりや複数言語の交錯が確認され、しめくくられる。

#### <論文審査の結果の要旨>

本論文にかかわる口頭試問は2014年6月18日（水）11時より12時まで、創思館302教室において審査員4名によっておこなわれ、公開公聴会は7月15日（火）、13時から14時まで創思館カンファレンスにおいて同じく審査員4名と多数の聴衆の参加によっておこなわれた。

文学研究を一国一言語文学研究の枠組みから解放するという大きな目標を設定し、ポーランド語文学を対象として、その作品群のもとに「異文化接触と複数言語使用」の様態を確認するという本博士論文は、全体としてきわめて密度が高くまた完成度の高い成果であることが審査員全員によって確認された。またポーランド語による文学にきわめて大きな寄与をしたユダヤ系作家に焦点を合わせるというきわめて野心的な試みである。というのもこの研究を完遂するにはポーランド語の習熟はもとよりイディッシュ語、ヘブライ語をマスターすることが求められるからである。申請者のポーランド語の習得（学術振興会特別研究員として留学をした）のみならずイディッシュ語さらにはヘブライ語への習熟（これら三つの言語からの引用には原語が記載され、ほとんど未邦訳であり学位請求者による訳が付されている）も高く評価された。ただし、各語の翻訳には改善の余地があることが、

審査員から指摘され、公聴会までに訂正された。

上記の高い評価を前提として、研究をよりいっそう深化する方向について各審査員から質問とコメントが寄せられ、学位請求者から適切な応答があった。

いくつかの論点を示せば以下のようなものである。

論文の意図は副題に明示されているとはいえ、「異文化接触」がとりわけトゥヴィムがジプシーに寄せた関心を指すのであれば、とりあげられた「マウゴジャトカの歌より」に描かれた若いポーランド女性がジプシー世界に傾倒してゆく描写は「異文化接触」という語では掬いきれないものを含んでいるのではないか。

複数言語使用と文学という主題への有効なアプローチが示されたことを認めたいうえで、あらためて申請者にとっての文学とは何かが問われる。日本語作家であるリービ英雄氏が「うまい日本語で書けば文学ではないと言われ、下手な日本語で書けば日本語でないと言われる」というジレンマを表明しているが、文学的言語というものの微妙な位置が表現されている。そうした言語による文学とは何なのか、あらためて学位請求者に問うてみたい。

『変身』を介護文学として読むことはある新鮮さがあると認めたいうえで、カフカ以後の世界文学のなかでカフカの普遍性をどうとらえてゆくかという問いは残る。戦間期に限定したにもかかわらず戦後に成立した読み方がもちこまれているのではないかという疑問が出された。

主題の設定に対して四人の作家を選ぶということはどのように根拠づけられるか、必ずしも明確な論拠は提示されていない。また選ばれた四人の作家についてもより踏み込んだ読みは可能であろう。たとえばルドニツキは『ねずみ』を1960年に重要な改作を施して再刊しているが、それをどう読むかにふれるとなると「戦間期」という限定と齟齬をきたす。フォーゲルは『アカシアが花咲く』をポーランド語とイディッシュ語両方で公刊したが、両者の関係と各言語の詩的効果はよりテキストに即して検討されるべきではないか。

本論文の達成した地点を前提に提起されたこれらの論点は、申請者の研究を今後一層深めるための提起である。そのような受け止めのうえで、申請者は自らの文学理解を「言語の身体的使用」と総括し、また今後はユダヤ系作家の群像を描きつつ主題を深める意志、さらには今後の研究におけるポーランドの東部の国境地帯、いわゆるクレシをふくむ東西国境地帯への注目を表明した。

以上を勘案したうえで、審査委員は一致して本論文が博士論文としての水準に十分達していると判断した。

#### <試験または学力確認の結果の要旨>

申請者は、本学学位規程第18条第1項該当者である。先端総合学術研究科は、査読付き学術雑誌掲載論文相当の公刊された論文を3本以上もつことを学位請求論文の受理条件と

している。受理審査委員会の審査により、本論文はその条件を満たすことが確認された。本論文に示された方法や知見のオリジナリティ、論文記述の明晰さにかんがみて、本論文は博士論文の水準に十分に達している。口頭試問と公聴会での報告および質疑に対する応答からも、博士学位にふさわしい学力を備えていることが確認された。また、参照されたポーランド語文献、イディッシュ語文献、ヘブライ語文献により申請者は学位取得にふさわしい外国語能力を十分に備えていると判断される。以上より、本審査委員会は、本学位申請者に対し、本学学位規程第 18 条第 1 項により、「博士（学術 立命館大学）」の学位を授与することが適切と判断する。